

## 高知県柏島における宝石サンゴ漁をめぐる近年の動向とその地域的影響 Development of precious coral fishery and its effects in Kashiwajima Island, Kochi pre- fecture

崎田 誠志郎<sup>1\*</sup>

Seishiro Sakita<sup>1\*</sup>

<sup>1</sup> 名古屋大学大学院環境学研究科

<sup>1</sup> Environmental Studies, Nagoya University

宝石サンゴとは、加工され装飾品として用いられるサンゴの総称である。生物学的には主にサンゴ科 (Coralliidae spp.) に分類され、造礁サンゴとは亜綱レベルで区別される。宝石サンゴは、世界的には地中海を中心として古くから採捕されており、国内で宝石サンゴ漁が始まったのは19世紀頃とされる。国内では高知県、長崎県、鹿児島県、沖縄県などが主要な産地であり、主に採捕されるのは太平洋産のアカサンゴ (*Paracorallium japonicum*) やモモイロサンゴ (*Corallium elatius*) などである。FAOの統計上では、この2種を採捕しているのは日本と台湾のみとなっている。ここ数年、この宝石サンゴ漁がにわかに注目を集めている。宝石サンゴを珍重する中国における経済発展を背景に、近年宝石サンゴ市場はバブル的な隆盛をみせており、数年間で原木価格は1.5~2倍にまで跳ね上がった。こうした状況から、乱獲や不適切な漁法による宝石サンゴ資源の枯渇が懸念されるようになり、このような背景のもと、2007年のワシントン条約締結国会議では、宝石サンゴをワシントン条約附属書2類に掲載するよう提言がなされている。結果的に2類への掲載は見送られたが、中国は上記の2種を含め計4種の宝石サンゴを附属書3類に掲載しており、これらの種に対しては国際取引の規制・監視が実施されている。しかし、宝石サンゴは一般的には水深100m以深の海底に棲息するため、その生態や資源量については、現在まで明らかになっていない部分も多い。そのため国内では、宝石サンゴをめぐる近年の国際的動向を受け、宝石サンゴ資源の適正利用を行うために、各自治体や研究機関によって本格的な実態調査が開始されている。

本発表で事例とする柏島は、戦前から宝石サンゴ漁が営まれてきた地域である。柏島は、高知県の南西端に位置する面積0.57 km<sup>2</sup>の小島であり、周辺海域には黒潮に育まれた非常に豊かな海洋生態系が形成されている。島の漁業の中心はタイ養殖や一本釣などの個人漁業であり、2008年の時点では、宝石サンゴ漁を営んでいた柏島の漁業者は数人たらずであったが、ここ数年での原木価格の高騰を受け、2010年には20人以上が宝石サンゴ漁を営んでおり、漁獲金額は2008年と比較して約44倍にまで膨れ上がった。これに対し、高知県では漁法の制限や禁漁期の設定といった従来の施策に加え、漁獲可能量の設定や毎月の成績報告書の提出義務付けなどを実施し、資源管理に努めている。ただし、少なくとも柏島においては、それまで宝石サンゴ漁に縁遠かった漁業者も多数参入しており、その操業実態は漁業者によって様々である。こうした状況を踏まえ、本発表では、地域スケールでの宝石サンゴ漁の実態を報告するとともに、ここ数年間の国際的なバブル的な需要に牽引された宝石サンゴ漁の操業が、地域構造に与える影響について議論する。

キーワード: 海洋資源, 宝石サンゴ, 柏島

Keywords: marine resource, precious coral, Kashiwajima Island